

国際共同発掘調査

唐長安城大明宮太液池

中国社会科学院考古研究所との共同による太液池^{たいえきち}の発掘調査は平成13年度より開始し、今年が最終年度となります。春の発掘期間中には7名の所員が調査に参加し、大きな成果をあげました。去る5月17日には発掘現場にて日中両国の記者に対して説明会をおこない、翌日、日本の新聞でも報道されました。

太液池は唐長安城大明宮の北半中央に位置します。池の規模は東西484m、南北は310mあります。両研究所は過去4年の調査で、池の西岸、北岸、池中の島、池南側の丘陵上を発掘してきました。

4次にわたる調査では多くの遺構を検出しています。池岸は版築で造営され、汀^{みぎわ}には木杭の護岸や庭石がありました。岸沿いには道路や回廊状の建物がめぐり、池に臨む建物、排水施設や井戸なども検出しました。池中にたつ蓬莱島の南側には、石組の貯水池や蛇行する水路、東屋、庭石が配置され、州浜^{すはま}状の遺構もみつかりました。池南側の丘陵上では、回廊と中庭からなる建物群がみつかり、象や灯籠の石製彫刻が出土しています。

今年度は池の南岸に調査区を設定しました。発掘総面積は約2800㎡です。2月から作業を開始し、5月末に終了しました。発掘の結果、池岸から池中に張り出す釣殿^{つりどの}状の建物、磚を積み上げてつくった護岸施設、池岸をめぐる道路、雨水などを集めて池に流し込む排水溝などが検出されました。

宮城内に位置する池の全貌を明らかにしたのは、中国でも初めてです。日本や朝鮮半島の古代庭園研究において、ひとつの指針を示すものといえるでしょう。（平城宮跡発掘調査部 今井 晃樹）



太液池での発掘調査風景

公開講演会(平成17年5月21日開催)

「考古学すんわ - 発掘お国柄事情 - 」

田辺所長より、欧米と日本の発掘方法の違いについて種々の事例についてエピソードをまじえた興味あふれるお話を紹介しました。

「東アジアの古代苑地」

7・8世紀代の東アジア諸国の苑池遺跡を概観しました。唐では、生産や軍事などの機能をも担う広大な苑にともなう苑池と、宮内にあり皇帝の私的な生活空間で、政治、儀式、信仰、遊興等の機能をもった比較的中・小型の苑の苑池の2種が組み合い、皇帝の権力を維持し、顕示する仕組みとして有効に機能していました。大明宮太液池は後者の典型例で、上陽宮園林遺跡の苑池は、後者の中でも、もっぱら鑑賞や遊興に使われた、より私的空間的色彩が強いものでしょう。新羅・雁鴨池^{がんおうち}、渤海・上京龍泉苑池^{じょうきりゅうせんふ}、飛鳥京、平城宮苑池などでは、機能、設置位置、付施設などに、唐の強い影響を看取できます。なお、日本の苑池は、天武・持統朝に唐の影響下に萌芽し、奈良時代に確立したものと考えられます。

（飛鳥資料館 加藤 真二）

「上咋麻呂の悔」

「正倉院文書」に、「上咋麻呂^{かみのくい まろ}」なる人物の書いた、非常に興味深い2通の手紙があります。1通は、官職につけるよう力添えをしてほしい、もう1通は鰯を贈るので受け取ってほしい、というものです。

現在、咋麻呂の2通の手紙は別の巻物に収まっていますが、近年の研究で、もとは一巻の巻物に張り継がれていたことが明らかにされています。

正倉院文書の多くは、造東大寺司写経所という役所の帳簿類で、様々な文書を反故紙として再利用しています。咋麻呂の2通の手紙も反故として帳簿に利用されたことが判明しています。

以上から次のことがわかります。宝亀3年(772)10月23日の晩から翌日に人事があるという情報を得た咋麻呂が、親類のコネを頼りに上馬養^{かみのつま かい}(写経所でそれなりの地位にあります)に1通目の手紙を出します。しかし人事はなく、咋麻呂は28日には鰯を贈りますが、馬養には「不用」と突っ返されてしまいます。噂に右往左往しつつ、必死に官職を求める咋麻呂を哀れむのか、共感するのか、さて・・・。

（平城宮跡発掘調査部 馬場 基）